

WBC における問題点に関する研究

A study of problems for WBC

1K07B505-0

鈴木 嵩人

指導教員 主査 武藤泰明先生

副査 木村和彦先生

【1.序論】

WBC は 2006 年の第 1 回大会と 2009 年の第 2 回大会と日本代表の連覇という結果に日本国内で大きな盛り上がりを見せる一方で、参加国間における温度差や MLB 主導による運営システムなどに課題が見られた。2008 年の北京オリンピックを最後に野球が競技種目から外れた現在では、世界的に認知度の高い野球の国際大会は存在せず、WBC が担う野球の国際的普及における役割というのはますます大きな意味を持つようになっていくと考えられる。そういった意味でも WBC における問題点を改善していくことは、今後の野球の国際的な普及・発展に直結すると考えたことが今回の研究背景である。本論文では、WBC における認知度、大会運営組織、IBAF の実態や MLB との関係といった視点から WBC の分析を行っていく。

【2.WBC における認知度】

この章では WBC における認知度を観客動員数や TV 放送の視聴率といった視点で分析を行っていく。第 1 回大会と第 2 回大会を通じて全体の観客動員数は約 64000 人増加している一方で、ラウンド別に比較すると第 2 ラウンドで観客動員数が減少しているなど、安定した集客という点において不安定であるという結果になった。また、対戦カードによって観客動員数の差が大きく、参加国間での国民の温度差は実際に存在しているようである。視聴率でも日本では高い数字を示す一方で、開催国であるアメリカでは人気 4 大スポーツのオールスターゲームなどには足元にも及ばず、注目度の低さが露呈された。

野球というスポーツ自体の国際的知名度が低いのが現状であるが、2013 年の第 3 回大会から参加国を増やす意向を表明するなど、今後サッカーのワールドカップと肩を並べるようなスポーツイベントになっていくためにはさらに世界中のメディアに露出を増やしていく方が必要である。

【3.大会の運営組織】

この章では WBC が IOC や FIFA のような世界を束ねる中立的な組織ではなく、1 国のプロリーグである MLB 主導によって開催されていることによる問題点の分析を行っていく。

WBC の大会運営で上がった利益は賞金と各国野球組織への分配金に分別されるが、この分配率を定めているのは MLB である。大会連覇を果たした日本と比較しても MLB への分配率は突出しており、公平性を欠くものとなっている。また、メジャーリーガーの相次ぐ参加辞退についても、自らの利益を重視した MLB の定めた規定が消極的な姿勢につながっている。このような MLB の姿勢は自分達以外の世界と協調することを考えていない「閉鎖型モデル」を採用しているためで、欧州サッカーの外界との協調を前提としている「開放型モデル」とは対照的なビジネスモデルである。MLB の国際市場拡大戦略の一環として、WBC が開催されている間はこうした不平の改善は見込めず、中立的組織による開催が望ましいと考える。

【4.IBAF に関する分析】

IBAF は各国の野球連盟が加盟している国際組織ではあるが、MLB や NPB が加盟しておらず、アマチュア中心の国際大会を主催している。そのため、オリンピック競技種目から野球が除名された現在では国際的な影響力は弱くなっている。

MLB と IBAF の関係はこれまでオリンピックの選手派遣などを巡って、良好とは言えなかった。しかし、IBAF ワールドカップを WBC の予選に据える案が出るなど、野球後進国に大きな影響を及ぼす可能性を持つ動きを見せている。しかし、この案を実現するためには予選と本選の主催組織が異なるため、現状では問題点も多く、やはり新たな中立組織の設立が必要になってくる。

【5.結論・まとめ】

本研究の結果、WBC 開催においては新たな中立的な国際組織の設立が必要であるという結論に至った。また、現状の MLB の単独行動主義にストップをかける役割を持つのは世界中で MLB に次ぐナンバー2のプロリーグである NPB ではないだろうか。野球の国際普及に向けて各国の野球組織に呼びかけ、国際的に協議する場を作っていかなければならない。